

医学教授に聞く

青山 裕美 教授



あおやま・ゆみ 岐阜県立岐阜高校、岐阜大学医学部卒。京都薬科大学生命薬学研究所、岐阜大学医学部付属病院、米国ハーバードメディカルスクール・マサチューセッツ総合病院、岡山労災病院などを経て、2010年4月に岡山大学大学院医歯薬学総合研究科皮膚科学講師。同准教授を務めた後、15年4月から川崎医科大学皮膚科学教授。日本皮膚科学会皮膚科専門医。53歳。

4月から皮膚科の主任教授に就任されました。今後、どのような皮膚科にしていきたいとお考えですか。

本学皮膚科の最大の特色は、岡山県南の北部から西部にかけての広い医療圏の皮膚腫瘍と難治性皮膚疾

ら、患者さんをあらゆる方から専門的に診療できる皮膚科を目指していきたいと考えています。

皮膚腫瘍、皮膚外科に関しては、大学併設の付属病院で田中了講師を中心に診療しています。同時に、私が専門とする根治しにくい

おり、私も両院を歩きまわっています。大病院という珍しい病棟だけを持つという病棟ですが、日常的なコモンディージーズ（一般的な病気）からレアディージーズ（希少・難治性の病気）まで幅広くカバーしていま

皮膚通じ患者の全身診る

患の診療拠点であることで、これからの皮膚外科・皮膚腫瘍学に加え、自己免疫とアレルギーをキーワードに、自己免疫性水疱症、白斑、脱毛症、乾癬、アトピー性皮膚炎等にも重点を置き、幅広い疾患に対応していきます。また、皮膚科以外の診療科と交流しながら

皮膚疾患でも、高い専門性を生かした治療に取り組んでいます。岡山市中心部にある総合医療センターにも皮膚科があり、感染症や帯状疱疹など急性期の患者さんを多く診ています。

付属病院と総合医療センターで合同カンファレンスを開くなど連携を密にして

診察の時にはどんなことを心掛けていらっしゃるかと。皮膚だけを診るのではなく、患者さんをあらゆる方向から捉える総合皮膚科学の実践を重視しています。皮膚は体の表面を覆う単なる皮ではなく、人体で最

大の臓器です。外界の影響を受ける一方、「内蔵の鏡」と言われるように内臓の状態も反映します。皮膚そのものはもちろん、皮膚の下がどうなっているのかを確かむことが、治療の鍵となることが少なくありません。

視診、触診、問診に加え、皮膚の一部を採取して顕微鏡で検査したり、角層の水分量を測定装置で調べたり、ダーモスコピー（拡大鏡）で病変を観察したり、エコー（超音波）で病変の周囲の状態を確認したりと、さまざまな機器を駆使して原因を解き明かし、的確に診断を下さなければいけません。

私は現在、皮膚の表面にシリコンの膜を貼り付け、それを剥がして膜を観察するという新しい検査にも取り組んでいます。汗がどれくらい出ているかを直接見て、アトピー性皮膚炎などで皮膚の病気が進んだ高齢の患者さんの場合、貼付剤にかぶれてしまい、治療が続けられないという例もあります。目に見える症状だけでなく、生活環境など患者さんの背景も理解しながら、より患者さんのためになる治療を行っています。